



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第二次大戦中のソ連のフィンランド政策 : 戦後への展望によせて (II)
Author(s)	百瀬, 宏; Momose, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 21, 217-232
Issue Date	1976
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5066
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113035.pdf



第二次大戦中のソ連のフィンランド政策

——戦後への展望に寄せて—— II

百 瀬 宏

問題の所在

- I フィンランド側の戦争目的
 - II ソ連の和平工作とフィンランド政府
 - (1) 1941-1942年
 - (2) 情勢の転換—1943年—
 - (3) 和平交渉への道—1944年—
- (以上前号)
- III 反政府和平派の動向
 - (1) 体制内和平派の運動
 - (2) パーシキヴィの動き
 - (3) 反体制和平派の活動

(以上本号)

結語にかえて—ソ連側諸文献の検討を兼ねて—

III 反政府和平派の動向

第二次対ソ戦争——「継続戦争」——中のフィンランド国内における和平主張者は、総称して「反政府和平派」(Rauhanoppositio; Fredsoppositio)と呼ばれているが¹⁾、実際には、動機や目的も発想も異なるさまざまな運動の総称であって、何か組織された実体があった、というものではない。しかし、筆者なりにこれを大別すれば、体制内的な運動と、反体制的なそれに、まず分けることが可能であろう。前者は、通常「反政府和平派」と称されるものであって、政府の戦争政策批判から市民的権利の擁護にいたるまでのさまざまなレベルでの諸グループがそこに含まれる。そして、これらの諸運動は自国政治の反動化の阻止と体制の民主主義的な機能の回復に主要目標をおいていたといえるであろう。「反政府和平派」の組織化は、1943年8月20日の、いわゆる「33人文書」の大統領への提出をもって頂点に達した、といえるであろう。つぎに、後者に含まれるのは、当時非合法化されていたフィンランド共産党 SKP を漠然たる中核とした諸運動であるが、本稿の執筆段階においては文献史料の不足から詳細な全貌は明らかにしえないとはいえ、単なる SKP の動きとして一括できない性格のものであることはたしかである。さらに留意すべきことは、前者と後者の間にしても、必ずしも明瞭に分れていたわけではなく、とくに社会民主

1) H. M. Viitala, *Rauhanoppositio. Tutkimus poliittisesta oppositiosta Suomessa vuosina 1940-1944* [反政府和平派。1940-1944年のフィンランドにおける政治的反対派に関する研究] は現在のところ、このテーマに関する唯一のモノグラフであって、面接調査に多く依拠した詳細な研究であって、いささか経緯の叙述に流れて分析の不十分な憾みはあるが、貴重な労作であり、本稿はこの書物に大いに立脚している。

党から除名され第二次対ソ戦争初期に国家反逆罪で裁判に附された国会議員「六人グループ」の周辺を媒介として両者は微妙に関係しあっていたといえよう。事実、「反政府和平派」は、戦後、全体として、戦争責任者追及の運動として凝集してくるのである。

本節においては、まず、「反政府和平派」といわれるものの主要部分をなす、いわば「体制内和平派」の動向をとりあげる。ついで、それに直接参加しないにせよ、それらの動きと密接に関連した連合党指導者パーシキヴィの動向を検討する。かれをとくにとりあげるのは、パーシキヴィが戦争末期の対ソ和平交渉に登場したからばかりではない。戦後、首相、ついで大統領の印綬を結びて登場し、フィンランドの対ソ友好関係開拓の主導者として脚光を浴びることになるかれの、戦時下の動向を考察しておくことは、あくまでも戦後フィンランド政治史の前史としての狙いをもつ本稿のばあい、論文題目自体の要請を越えて必要であろう。いったい、パーシキヴィは、第二次対ソ戦争の期間をつうじて、フィンランド政府の対ソ政策にたいする秘かな批判を抱きつづけた、というのが通説である。しかし、かれが抱いていた対ソ政策構想は、単純な対ソ平和主義ではなかったのであり、この点の検討は、戦後のパーシキヴィの対ソ政策を理解する鍵となろう。つぎに、「反体制和平派」と総称したものの動きを、筆者の入手しえた断片的な情報にもとづいてではあるが、追ってみたい。そして、節のしめくくり的な意味で、以上の諸運動を、当時ソ連側がどのように見ていたかに関して、さしあたりの手がかりめいた史料を提示しておくこととしたい*。しかし、これらの考察に先立ち、まず「反政府和平派」の活動の対象となったフィンランド政府の、第二次対ソ戦争下の国内諸政策について、本節の課題の関連するかぎりにおいて、概観しておこう。

第二次対ソ戦争中のフィンランド政府に向けられた、反政府和平派の非難の要点は、(1) 戦争目的についてかれらを納得させる説明をなしえなかったこと、(2) 戦争の遂行にあたって議会とその背後にある国民に十分な情報を提供しなかったこと、(3) それどころかむしろ厳しい言論統制を行なって、国民の民主的な権利をおかしたこと、という、相互に関連した三つの事柄にまとめることができるであろう。

第1の点についてみるならば、すでに本稿のIにおいて見たように、大統領リュティの指導するフィンランド政府は、第二次対ソ戦争の勃発を、冬戦争に続く一連のソ連のフィンランドにたいする侵略行為の一環として説明し、そこから余儀なくされたフィンランドの対ソ戦争は自衛のための戦争であると説明していた。そのことは、のちに反政府和平派として積極的に活動することになる人々にも、フィンランド政府が戦争遂行にあたって、その軍事行動を極力限定するものと考えただけの根拠を与えていたと思われる²⁾。そうした人々にとって、まさに「青天の霹靂」(salamanisku kirikkaalta taivaalta)として映じたのは、1941年7月11日に発せられた総司令官マンネルヘイムの布告であった、といわれる³⁾。

* 本節における「反政府和平派」の取扱いは、前節の外交関係の取扱い同様、事実関係の描写にとどめ、その評価はむすびでまとめて試みたい。

2) そうした1人である社会民主党員ヴィルタネン Atos Wirtanen は、回顧録の中で「私はどうかといえば、政府が戦争の限定に尽力し、歴史の定めた国家の境界線を軍隊に越えさせることはないだろうという、子供じみた信念をもっていた」と告白している (Atos Wirtanen, *Pimeitä voimia vastaan* [暗黒の力に抗して] (Helsinki, 1964), s. 176.

3) *Ibidem*.

第二次大戦中のソ連のフィンランド政策

この全軍にあてた布告の中で、マンネルヘイムはソ連領に属する東カレリアの解放を公然と呼びかけており⁴⁾、それは、戦争目的を自衛と冬戦争による失地の回復に限定しているフィンランド政府の言明とは、明らかに矛盾していた。マンネルヘイムの伝記作者は、美文に飾られたこの布告が全軍の士気鼓舞を目的とした以外の何ものでもないとしているが⁵⁾、しかしそのような士気鼓舞自体が、たんなる失地回復を越えた、そしてIKLやAKSなどのフィンランド国内の極右団体の宣伝する、「大フィンランド」の観念につながる国民の情緒的期待にのって行なわれているのである。マンネルヘイムの本来の意図がいずこにあったにせよ、フィンランド政府は、布告が軍に向けられたものであって、国家の政治的計画を提示したものでないことを、ひそかに打消さなければならなかった⁶⁾。しかも間もなく、フィンランド軍は冬戦争前の国境を越えて進撃するにいたり、政府はあらためて、それが軍事的な必要にもとづくものであって、政治的な理由に発するものでないことを説明しなければならなくなった⁷⁾。フィンランド政府は、自衛戦争であって失地の回復をめざしたにすぎないという戦争目的の公式言明と、現実にフィンランド軍がソ連領東カレリアを占領しているという事態との食い違いを、反政府和平派の追及にたいしいかに説明するかに、「継続戦争」の期間をつうじて、悩まされることとなったのである。

第2の点は、この第1の点と密接にかかわっていた。すなわち、反政府和平派の国会議員は、戦争目的が不明確なことに鑑み、事態についての正確な情報を要求し、しばしば国会での追求をこころみた。いったい、フィンランド政府は、すでにみたような事態の進行のもとで国会議員のあいだに、自衛戦争が征服戦争に転化したのではないかという疑惑が抱かれたのににもかかわらず、対ソ開戦後半年近く、戦争目的に関して国会と接触しようとはしなかった。フィンランド政府は、ようやく、11月29日に国会に重大通知を行なうとしたが、それは上記の一部議員の期待に反して、儀式的にモスクワ講和条約を否認し、旧フィンランド領であった占領地をフィンランド国家に編入する提案を行なってこれに形式的な承認をとりつけるだけのものもくろみであったため、強い議員の抗議を受けたのである⁸⁾。

4) その全文は、次のとおりである。「1918年の独立戦争に際して私は、フィンランド人とヴィエナ・カレリア人にたいして、フィンランドと東カレリアが解放されるまで剣をおさめないと言明した。私は、フィンランドの農民の軍隊の名において、その勇敢な男子とフィンランドの犠牲的精神をもつ婦人に信をおきつつ、このことを誓った。／ヴィエナとアウヌス〔東カレリアの地名〕はこの誓約の実行を23年間待ちのぞんできた。フィンランド・カレリア〔冬戦争によってソ連に割譲されたフィンランド領カレリア〕は、光栄ある冬戦争ののち荒廃しつつ、1年半にわたり夜明けを待ちのぞんできた。／独立戦争の戦士よ、冬戦争の英雄よ、勇敢なわが兵士よ、／新しき日は到来した。カレリアは立ち上り、自らの部隊を組んで諸君の隊列とともに進軍する。カレリアの解放と偉大なフィンランドが、世界史的事件の雪崩のうちに、われらの行く手に、微かな輝きをみせている。諸国民の運命を導く天帝よ、フィンランド軍をして、私がカレリアの同胞達にたいしてなした約束を果さしめ給え。／兵士達よ。諸君が踏みしめる大地は、われらが同胞の血と苦難がしみこんでいる。諸君の勝利はカレリアの解放につうじ、諸君の仕事がフィンランドにとって偉大で幸いな未来を創りだす」(Erik Heinrichs, *Mannerheim Suomen kohtaloissa* [マンネルヘイム。フィンランドの運命とともに], II: *Suomen marsalkka* [フィンランドの元帥] (Helsinki, 1960), ss. 274-275. より引用)。

5) *Ibidem*, s. 275.

6) Wirtanen. *mt.*, s. 176.

7) *Ibidem*, s. 177.

8) *Ibidem*, s. 184.

政府と議会のあいだの亀裂は、その後ひろがる一方であった。

第3に、上記の二点との関連で高まってきた不満にたいし、政府はつよい言論統制を以て臨んだ。一般に、この第二次対ソ戦争については、「冬戦争」の際の検閲が軍事的な性格にかぎられていたのにたいし、強く政治的な性格を帯びていたことが指摘できる。そして、このような中で、政府批判の活動は、厳しい取締りの対象となっていく。そもそもフィンランドにとってこの第二次対ソ戦争の勃発は、政府批判者にたいする弾圧によって彩られていた。すなわち、開戦後間もない8月23日から29日にかけて、フィンランドの国家警察は、「六人グループ」(Kuutoset)と称される、元社会民主党所属の国会議員、すなわち、ヴィーク K. H. Wiik, ライサネン Yrjö Räisänen, スンドストロム Cay Sundström, アンプヤ Mikko Ampuja, リュドベリ Kaisu-Mirjami Rydberg, メルッティ Väinö Meltti を逮捕した。これに同じく社会民主党左派のヘロ Johan Helo を加えた7名は、「フィンランド・ソ連友好協会」SNS に加わっていた等のかどで、国家反逆罪で起訴され、いずれも有期徒刑に処されたのであった。

(1) 体制内和平派の運動

ここにいう体制内和平派は、第二次対ソ戦争の当初から存在していたわけではない。開戦当初は、そもそもこの戦争に批判的な政治家や知識人はきわめて少なかった⁹⁾。連合党はもとより、農民同盟にしても党内の空気は圧倒的に対ソ戦争支持であり、東カレリアとコラ半島の獲得を党議決定としている有様であった¹⁰⁾。進歩党はこれにより慎重ではあったが、西方文明をおびやかすポリシェヴィズム覆滅の戦争に賛意を表していたし¹¹⁾、スウェーデン系人民党も、この段階では、ゲルマン民族との提携を望む指導部の見解が支配的であった¹²⁾。ただ、社会民主党にかぎっては、対ソ戦争前からすでに、「六人グループ」の追放やドイツ軍の到来をめぐる政府批判的な指導者が少なくなく、かれら相互間に接触が行なわれていた。こうした中で既述の7月11日のマンネルヘイムの布告は、党内に反政府和平派をつくり出す決定的な契機となった¹³⁾。さらに、フィンランド軍が、「冬戦争」の失地を回復して次々に旧国境を越えて進撃すると、党委員会 (puoluetoimikunta) においても、ペッカラ Mauno Pekkala やケト J. V. Keto は国内の戦争疲弊の兆候を指摘していた¹⁴⁾。

こうした中で政府は、11月29日、国会秘密会において戦争経過を説明し、ソ連から奪回された旧フィンランド領の再編入承認を求めたが、スウェーデン系人民党のフルヘルム Ragnar Furuholm は、政府が防衛戦争であることを再確認するように求めるとともに、旧国境を越えて戦争を継続することが国民に犠牲を強い、各層に不安を生ずることに

9) 1941年6月25日の国会における、政府の対ソ開戦説明にたいして、発言者のうちでただ1人、これに抗議したのは「六人グループ」を代表するヴィーク K. H. Wiik であった。かれは、政府がドイツに依存した政策によってフィンランドの中立と独立をおかさせた、と非難した。*Salaiset keskustelut. Eduskunnan suljettujen istuntojen pöytäkirjat 1939-1944* [秘密討議。国会秘密会議事録]. koonnut ja huomautuksin julkaissut Atos Wirtanen (Lahti, 1969), ss. 96-97.

10) 1941年10月16日の党議決定。Viitala, *mt.* s. 80.

11) *Ibidem*, s. 83.

12) *Ibidem*, s. 61.

13) *Ibidem*, s. 71.

14) *Ibidem*, s. 72.

なりはしないか、との疑念を表明し¹⁵⁾、12月1日には社会民主党のヴィルタネン Atos Wirtanen が、議長の制止を受けながらも、政府が国会を無視して外交・軍事政策を行なってきたと抗議し、その対外権力政治と防共協定参加を非難した¹⁶⁾。これは、すでにみたようなフィンランド政界の一部にくすぶり出していた、政府の戦争政策にたいする疑念と不満が国政審議の場において公然と表明された最初の機会なのであった。

この事件が起ったのち、国会議員をはじめフィンランドの政界においては、事態の重大視と早期和平への焦慮がひろまりはじめ、また、まだ少数とはいえそうした人々の間の相互接触の動きが、ようやく活発化しようとしたのである¹⁷⁾。かれらは、委員会を形成し、またその下部委員会をも組織して、定期的に会合して情報を交換し、内密にパンフレットを作成して国会議員と国会外の有力市民に配布した¹⁸⁾。同委員が総司令官マンネルヘイムにもそれを配布しているのは¹⁹⁾、戦争の成行きに関して現実を直視した判断をもつものが、フィンランドの戦争離脱工作の鍵とみなされたからであろう。この平和委員会が、体制内和平派の組織的な活動の中核的な役割を演じることとなるのであるが、さしあたりの活動は、言論検閲にたいする批判と、外相にたいする批判の2つに向けられた。しかしこれらの活動だけでは、フィンランドが対ソ戦争離脱のための具体的な契機をつかむことにはならず、そこで平和委員会ないし体制内和平派は、1943年2月に行なわれる大統領選挙への政治工作を目標とするにいたった。

ところで、フィンランドでは大統領選挙は、まず国民の投票によって選挙人を選出し、これらの選挙人によって大統領を選出する制度となっているが、当時は戦時下でもあり、1937年の大統領選挙の選挙人名簿をそのまま用いて、大統領選挙を行なうこととなった。したがって、平和委員会の活動は、この選挙人投票に向け行なわれることとなったのである。当初は、現大統領リュティが再選されることは確実とされていた²¹⁾。しかし、選挙日が近づくにともなって、マンネルヘイムを大統領候補にしようとする動きがつよまってきた。マンネルヘイムの支持者は一樣ではなく、極右勢力の一部にもその動きがあったといわれ、また、国防相ヴァルデン R. Walden が「フィンランド戦友連盟」(在郷軍人)

15) *Salaiset keskustelut*, s. 123.

16) ヴィルタネンは、11月29日の国会が儀式的なものであったことにかんがみ、当日発言の予定を3日間ずらしたのであった (*Wirtanen, mt.*, ss. 185-187)。なお、*Salaiset keskustelut*, s. 101; C. O. Frietsch, *Finlands ödesår* [フィンランドの運命], (Stockholm, 1945), s. 395 参照。従って、ヴィルタネンの質問を11月29日とするヴィータラの記述は誤りであろう (*Viitala, mt.*, s. 73)。

17) *Wirtanen, mt.*, s. 190.

18) *Ibidem*, ss. 191-192; *Viitala, mt.*, ss. 85-89, 91-93. こうした体制内和平派の組織化は、まず社会民主党内に、そのイニシアチブをとる動きが現われ、それにスウェーデン系人民党内の政府批判者が関係をもち、さらに1942年秋には、それ以外のブルジョワ政党、すなわち、農民同盟のケッコネン Urho Kekkonen やシルト Yrjö Schildt ら、進歩党のインキラ Arvo Inkilä が連携していくというゆるい経過を辿ったようである。しかし、体制内和平派の動きは、各地にさまざまなクラブができるなど複雑であった。また、総じて、対スウェーデン関係を憂慮するスウェーデン系政治家の活躍がめだっている。

19) *Wirtanen, mt.*, s. 192.

20) *Ibidem*, s. 195.

21) Paavo Hirvikallio, *Tasavallan presidentin vaalit Suomessa* [フィンランドにおける共和国大統領選挙 1919-1950年] (Porvoo-Helsinki, 1958), s. 106.

に依拠してかれを推そうとしていた²²⁾。しかし、今一つ注目すべき支持勢力として体制内和平派が登場するのである。

マンネルヘイムを推そうとしたのは、体制内和平派のうちでも、とくに農民党とスウェーデン系人民党であり、マンネルヘイムが、一般にはフィンランドの国内戦争における白衛軍司令官、「冬戦争」における対ソ戦争指導者として知られながらも、実は国内戦争当時ドイツ軍への出兵依頼に反対し、冬戦争前夜には彼我の軍事力の落差から対ソ和協の道を説いた現実的感覚をもった人物であることを評価し、かれの名声を休戦実現に利用しようとしたためであった²³⁾。しかし、マンネルヘイム推挙案は、体制内和平派の中で有力な勢力をなす社会民主黨員を納得させることができなかった。社会民主党所属の和平派もまた、上記のようなマンネルヘイムの一面は認めており、かれを休戦実現のためのひとつのテコとして活用することは考えていたのであるが、しかし、白衛軍司令官として社会主義者を抑圧した前歴をもつ人物を推すことは、社会民主党の節操にもかかわることであった。しかも社会民主党系の和平派のあいだでは、国内戦争後の初代大統領候補者としてマンネルヘイムを破り、また1930年代前半の極右運動にたいする殉教者的反対者として知られるストールベルイ K. J. Ståhlberg²⁴⁾ を推そうとする願望が強かった。かくして、各党黨員の参加する和平委員会が開かれて大統領選挙の問題を議した時、マンネルヘイム派とストールベルイ派に分れ、ただリュティの再選という点でだけ見解が一致するという有様であった²⁵⁾。

こうしたなかで、1943年1月から2月にかけて、各党の幹部会議と大統領選挙人の会合が次々に開かれ、それぞれに態度を決定していった。後者は前者の意向をほぼ反映していたが、若干の変動も生じた。連合党の選挙人会議では、従来僅少の差でリュティ派が過半数をなしていたのが、小グループの移動によってマンネルヘイム支持が過半数を占めた。進歩党はリュティ支持で一貫しており、スウェーデン系人民党は逆にマンネルヘイム支持で固まった。農民同盟の選挙人会議は、マンネルヘイム支持37名、リュティ支持19名となり、また社会民主党のそれは、リュティ支持71名、ストールベルイ支持14名、パーシキヴィ支持1名と分裂した²⁶⁾。このようにして、各党選挙人の会合結果に関するかぎり、リュティとマンネルヘイムが伯仲した対抗候補者として大統領選挙を争うことになったのである。ところが、連合党の選挙人団の団長リンコミエスが出馬を促すためマンネルヘイ

22) *Ibidem*, s. 107.

23) マンネルヘイムを推した一人、農民同盟議員シルトは、ヴィルタネンに次のような評価を吐露している。「[マンネルヘイム] 元師は、軍人としてはすぐれていない。[だが]かれは多くの政治家よりも広い歴史的・政治的視野をもっている。かれは政府よりも客観的に地理的条件やフィンランドの地位を評価していると、私はいいたい。……われわれは、[国内の]親独派に対抗するために元師の権威が必要だ。それにロシア人もフィンランドの政治家より軍人の方が馬が合うだろう」(Wirtanen, *mt.*, ss. 200-201)。

24) これらの点については、さしあたり小著『東北欧外交史序説』(福村出版, 1970), 90, 111-112 ページ参照。

25) Wirtanen, *mt.*, s. 202. もっとも、社会民主黨員であるヴィルタネンの、「リュティよりもストールベルイを選んだ選挙人は決戦投票のばあいにはマンネルヘイムを選ぶだろう」(*Ibidem*, ss. 202-202) という読みは、他の社会民主黨員の間にも共通していたであろう。

26) Hirvikallio, *mt.*, ss. 117-119.

ムに電話をかけると、マンネルヘイムは、必要とされれば大統領就任を拒否はしないが、それには選挙人の大部分がかれを支持して当選確実なことが条件であるとして、事実上立候補を拒絶した²⁷⁾。ここにおいて、2月15日に行なわれた大統領選挙人の投票では、300票のうち269票をえて、リュティが再選されることとなったのである²⁸⁾。再選されたリュティは、リンコミエスを首相に選び、外相にラムサユを据えるという新たな政府メンバーで出発することとなるが、体制内和平派の側では、リュティの大統領再選を敗北と受けとめながらも、内閣の更迭は部分的な勝利であるとして新首相・外相が早急に単独和平へと歩を踏み出すことに期待をかけたのであった^{29a)}。

しかし、リンコミエス内閣の発足後もフィンランド政府には、ソ連との単独和平への動きはみられず、体制内和平派のあいだでは、フィンランドが対ソ戦争をドイツの終局的な敗北にいたるまで続けることとなり、無条件降伏を強いられて国土が占領されることになるとのではないかという恐れが台頭してきた^{29b)}。そして、この頃になると、そのような直接対外政策とかかわる関心ばかりでなく、亡命ユダヤ人問題³⁰⁾、反戦運動裁判問題³¹⁾などをめぐるさまざまな関心のレベルでの運動が重疊的に³²⁾、かつ次第に広く組織されるようになり、それらの運動がまた、早期和平の要求という一点において収斂する状況となってきた。そうした「体制内和平派」の運動の深化と拡大の頂点に立つ動きとして、社会民主党内の反政府和平派が中心となり、フィンランド大統領あての、次のような書簡を起草する

27) Linkomies, *mt.*, s. ; Hirvikallio, *mt.*, s. ; Mannerheim II, 362-363.

28) 票の内容は次のとおり。

リュティ	269
コティライネン	4
ストールベルイ	1
マンネルヘイム	1
マンネル	1
白票	24 (Hirvikallio, <i>mt.</i> , s. 122)

29a) Wirtanen, *mt.*, s. 205.

29b) *Ibidem.*, s. 206.

30) フィンランドには本来、「ユダヤ人問題」は存在しなかったといえるが、1938年頃から、ナチス・ドイツに追われたユダヤ人がフィンランドに避難、移住してきた。当時のフィンランド内相ケッコネンは、これを受入れるという態度を表明し、第二次対ソ戦争の折には、亡命ユダヤ人の数は、300名に達していた。かれらは、フィンランドでは失業に悩まされていたが、戦時下にかれらは各地に移されたうえ、まだ戦闘区域の中に含まれるスールサーリ島 (Suursaari) に収容された。1942年10月にナチス・ドイツの警察長官・ヒムラー Heinrich Himmler がフィンランドを訪れた時、かれは、ユダヤ人亡命者の引渡しを要求した。フィンランド政府はドイツの圧力に、結局8名を「国外追放」としたが、この間、こうした措置を阻止すべく「亡命者委員会」がつくられ、反政府和平派の指導者もこれに加わっていた。Viitala, *mt.*, ss. 84, 85, 89-90; Wirtanen, *mt.*, ss. 216-222.

31) フィンランド共産党員リッカ (後出) が民間防衛軍に逮捕され、反戦紙を発行したかどで死刑を宣告された。かれの助命に関しては、社会民主党やスウェーデン系人民党の「反政府和平派」の人々が加わって運動し、結局1973年7月30日、リッカは死一等を減ぜられた (Viitala, *mt.*, ss. 105-108).

32) ここに注目すべきは、さまざまな関心レベルで組織されたこれらの運動のいずれにも、その指導的な活動家として、スウェーデン系人民党のフリーチュ、社会民主党のヴィルタネン、ケト、ベツカラ、ルウートウ Yrjö Ruutu (国際政治学者でもある) その他の共通の顔触れがみられることである。これはフィンランドが小規模な国家であるという理由もあろうが、むしろ、問題の重疊性を物語るものであろう。

にいたった³³⁾。

「諸党派に属する下記のフィンランド市民は、本状を通じ、大統領閣下にたいし、わが国の政治的地位が近年多くの点で全般的に明瞭に悪化する兆候を見せており、それゆえに国内には不安な気分がひろまりはじめているという理由から、その憂慮の念をお知らせ申し上げる次第です。

1941年の独立記念日に国会が、モスクワ和平によって放棄された地域の主要部分をフィンランドに再結合した時、わが国民が望んでいたことは、その行為によって達成されたのであります。わが国民は、大国間の果し合いに参加したいとは欲しておらず、自身の観点からして絶対不可避なごとき目的のためにのみ、困難を背身う覚悟をしているのであります。

わが国軍は、守備態勢にとどまること久しく、また戦線においては大規模な軍事戦闘も行なわれておりません。しかしながら、国民の多くは、わが国が、危険であり且つわが国の将来にとっておそらく運命的な情勢へ向って滑っていきつつあることに、すでに以前より気づかざるをえなくなっております。この主張を証拠だてるのに細かな指摘は必要ありません。それが真実であることは明白であります。

とくに最近わが国で憂慮を招いているのは、わが国のアメリカ合衆国にたいする関係が、次第次第に悪化していることであります。当地駐在米公使が去って以来、国民大衆を不安にかきたてる一連の出来事がおこっております。その明白な証拠として、フィンランド・アメリカ協会が最近設立された例があります。われわれの考えでは、近い将来のわが対外政策の最重要目的がアメリカ合衆国にたいするわが国の関係を再び良好で信頼に満ちたものに戻す努力におかれるべきであります。

しかしながら、現下の情勢が、わが国指導者の側からの他の活動をも要求していることを、われわれは完全に承知しています。この点でのわれわれの希望を簡潔に申せば、わが国の指導者は、わが国が現在行なわれている列強間の戦争から脱出し、現況が要求する交渉によってわが国の独立と自由と平和を確保するような活動に努力せざるをえないはずだと思います。こうした可能性は、ただちに検討し、試みる努力がなされるべきであろうと思います。

われわれは、わが国の地位と安全のためのわれわれの憂慮を大統領閣下にお伝えしたく存すると同時に、わが国の対外政策を指導される閣下が、上記のわれわれの提出した観点に注意を払われるよう敢えてお願いする次第です³⁴⁾」。

この書簡草案に署名を依頼するにあたっては、著名人であること、国会議員とくに国会の外交委員メンバーをできるだけ多く加入せしめること、各党に公平なひろがりをもつこと、著名なジャーナリストやフィンランド・アメリカ協会の幹部を含むこと、などが方針

33) はじめは、国会における質問のかたちで政府の反省をもとめることが計画され、社会民主党のヴィルタネンが起草し、ついでかれがストックホルムに用務で去ったため、J. V. ケト、V. ヴォイオンマーらの社会民主党議員が修正草稿を作成した。しかし、その間に、むしろ大統領宛の書簡とすることに計画が変更され、さらに、保守党の U. K. パーシキヴィ、スウェーデン系人民党の C. O. フリーチュラも加わって、その起草がなされたのである (Viitala, *mt.*, ss. 121-125)。

34) Viitala, *mt.*, ss. 125-126 に全文引用されている。

とされ、結局 33 名が署名した³⁵⁾。そのうえで、書簡は、1943 年 8 月 20 日、ケトラ社会民主党国会議員 3 名によって大統領リュティに提出された。この書簡をいかなるかたちで公開するかに関してはさまざまな見解があったが、おそらくはケトの筋からスウェーデンに伝えられ、同国の代表的新聞『ダーゲンス・ニューヘーテル』Dagens Nyheter に掲載された。

「33 人文書」が直接の効果を生まずにおわったのちは、表面「体制内和平派」の側では積極的な動きはみられなかった³⁶⁾。しかし、それは早期和平への関心が減退したことを意味するのではなく、逆に、1943 年秋には、従来比較的に動きが乏しかったフィン系のブルジョワ諸党派のあいだに、「体制内和平派」が増大していく兆しがみえた³⁷⁾。同年末には、「体制内和平派」の中核的な部分は、「平和・独立・民主主義」(Rauha-itsenäisyys-kansanvalta) にスローガンをまとめ、対外政策上は、フィンランドの戦争離脱とアメリカへの真意の伝達、およびソ連との友好関係の創出を、そして内政上は、政府による検閲の制肘、警察や国営報道機関の粛正、合法的状態への復帰を要望した³⁸⁾。年末の、「6 人グループ」の釈放を求める動きもその一環と見なしうるであろう。こうした「体制内和平派」の言動には、ナチス・ドイツ側は注意を払っており、同派と気脈をつうじていた社会民主党出身の閣僚ファーゲルホルム K. A. Fagerholm は、穀物の輸出停止を切札としたドイツ側の要求によって、12 月に解任されるにいたった³⁹⁾。

1944 年になると、2 月に開かれた社会民主党委員会において、ケトが党内和平派を代弁して、フィンランドが敗戦の予想の中で独立と領土を維持するための具体的な対ソ交渉案を提出して採択され⁴⁰⁾、また従来戦争強行論が支配的であった農民同盟の中にも、外交問題に関して見解の分裂が生じるようになった。対ソ和平問題を審議した 3 月の国会では、150 対 80 で対ソ交渉の継続を政府に勧告することとなったが、反対票を投じたのは、連合党と農民同盟にかぎられていた⁴¹⁾。なお、この時期に、こうした「体制内」和平派は、「反体制和平派」にも接触を試みている。もっともこれは、第二次大戦後に SKP の指導者が誇張しているほどの性格のものではなく、SKP が戦後に何を構想しているかを探知するためであった、といわれる⁴²⁾。さて、対ソ戦争の見通しが悪化するにつれて、フィンランド政府の言論取締りはいよいよ強まり、政府批判の論陣を張ってきたスウェーデン語有力新聞『スヴェンスカ・プレッセン』Svenska Pressen が発行停止処分を受けるような情勢の中で、「体制内和平派」の活動はむしろ積極化した。6 月にリップントロップがフィンランドを訪問し、リュティが単独不講和の誓約に署名すると、70 名の国会議員の賛同を見込んで、議会における質問がケッコネンによって準備された⁴³⁾。こうした政府への正面から

35) *Ibidem*, ss. 127, 138.

36) Viitala, *mt.*, s. 157.

37) *Ibidem*, s. 156.

38) *Ibidem*, s. 157.

39) *Ibidem*, s. 161.

40) ただし、口頭で党出身の閣僚に伝える旨が決められたただけであった (*Ibidem*, s. 162)。

41) *Ibidem*, s. 166.

42) *Ibidem*, s. 165.

43) *Ibidem*, ss. 173-174.

44) 実際には質問は行なわれなかった。 *Ibidem*, s. 179.

の批判の企てと平行して、フィンランドがドイツに軍事的に抱きこまれていくという予想から、亡命政府樹立ももくろまれた。これには二案があり、そのひとつは社会民主党員のツィリアックス Lauri Zilliacus が構想したもので、スウェーデンに脱出して、パーシキヴィ、ツィリアックス、ヴィルタネンを含む政権を樹て、反政府宣伝活動に乗出そうとするものであった⁴⁵⁾。いまひとつはニュステーンの計画したものであって、これもスウェーデンにパーシキヴィを長とする亡命政府を樹立することを企てていた⁴⁶⁾。いずれも計画倒れにおわったが、ただとくに、後者の準備工作としてのスウェーデン政府との接触から、のちにみるように、8月の対ソ和平交渉の緒がつかまれることとなったのである。

(2) パーシキヴィの動き

パーシキヴィは、1941年6月に駐ソ公使の職を辞してから、第二次大戦末期に対ソ和平交渉使節として返り咲くまでのあいだ、まったく私人としての生活を送っていた。この間かれがフィンランド政府の対ソ政策ないし戦争政策に大きな不満をもっていたことが事実であるにしても、かれが当時のフィンランドの政治状況にたいして表立った働きかけをしなかったかぎりにおいては、パーシキヴィの言動を追うことは、さしたる意味をもたないであろう⁴⁷⁾。しかし、かれが政府にたいする批判者であったことを単に指摘するばかりでなく⁴⁸⁾、パーシキヴィの政府批判がいかなる情勢判断と視点に立脚して行なわれたか、を明らかにすることは、当時のフィンランド政府にたいする批判が、いかなる妥当性と限界を有していたのかを明らかにするために、必要であろう。

さて、パーシキヴィが、第二次対ソ戦争におけるフィンランド政府の政策に批判的であったのは、かれがソ連の国是に共感を覚え、あるいはソ連の対独勝利を期待していたからでは、まったくなかった。たしかに、かれは、ヒトラーの崇拜者ではなく⁴⁹⁾、また、第二次対ソ戦争の積極的な推進者が望んでいたような「大フィンランド」の夢の実現が、ヒトラーの完全な勝利のもとでは終止符を打たれるであろうことも見抜いていた⁵⁰⁾。しかしながら一方、国際関係を列強の権力政治の場とみるパーシキヴィは、ソ連のパワーにたいする均衡要因としての強国ドイツの役割を高く評価していた。1941年初頭から春にかけて、かれは、大統領リュティへの書簡の中で、ドイツの敗戦がヨーロッパのポリシェビキ化をもたらす、としてアメリカの対独戦争参加を危ぶむ一方、フィンランドがスカンディナヴィア全体とともに、ドイツの勢力圏に入ることを望んでいた⁵¹⁾。ただし、この構想は、不可侵条約にもとづく独ソの友好が継続するという予想に立ってのことであった。そして、こ

45) *Ibidem*, s. 185.

46) *Ibidem*, s. 186.

47) パーシキヴィは、せいぜい、フィンランドの戦時政府指導者から邪魔者視され、スイスへの送り込みが企てられた程度であった。R. Svento, *Ystäväni juho Kusti Paasikivi* [私の友人ユホ・クステイ・パーシキヴィ], Porvoo. Helsinki, s. 11.

48) パーシキヴィの政治家生活を扱った次の研究は、いずれも、こうした扱い方にとどまる。J. K. Paasikivi, *Suomen politiikassa* [フィンランド政治における J. K. パーシキヴィ]. I. Hakalehti toimittanut. 1970, Helsinki, s. 80; M. Rintala, *Four Finns. Political Profiles*. Los Angeles, 1969. p. 100. なお、僅かに問題点に言及しているものとして、Viitala, *mt.*, s. 117がある。

49) Svento, *mt.*, s. 11.

50) *Ibidem*, s. 17.

51) J. K. Paasikivi. *A Pictorial Biography*. Uuno Tuominen ed., Helsinki, 1970. pp. 37-38.

第二次大戦中のソ連のフィンランド政策

の予想が崩壊し、ドイツの対ソ攻撃の噂が公然と流れ、フィンランドの軍部筋がドイツの対ソ楽勝に期待を寄せていることが明らかになると、パーシキヴィは、対ソ戦争においてはドイツの敗北の恐れがあるとし、そのばあいフィンランドがソ連の前に孤立する結果を懸念して、フィンランド政府がドイツの手に自国の運命を委ねつつある状況に絶望を感じていた。そして、この点で、「フィンランドの唯一つの救いはドイツがソ連を粉碎することである」と考える大統領リュティと、決定的に対立したのであった⁵²⁾。

こうした中でパーシキヴィは、独ソ戦争を大状況とするフィンランドの第二次対ソ戦争の勃発を迎えたわけであるが、私人の立場に身をおきながらもかれは、しばしばフィンランド駐在アメリカ公使にたいし、事態の成行きについて意見を述べ、またアメリカの行動に示唆を与えようとしていた。ナチス・ドイツの対ソ戦争見通しが一般にまだ悲観的なものとはなっていなかった1942年6月2日にパーシキヴィは、アメリカ公使にたいし、力(force)のみがロシアの膨脹を阻止しうる、と述べるとともに、ただし、ロシアは自給能力をもつので、長期的な展望に立つならば、軍事力だけではこれに抵抗しえない、と声明した⁵³⁾。これは、ヒトラーの対ソ戦争を批判した指摘とも受けとれるが、アメリカ公使の報告がパーシキヴィがドイツによる対ソ均衡を説き、英米の「政治的理想主義」を斥けた旨伝えているところから推測するならば、パーシキヴィの真意はむしろ、ヒトラーの安易な対ソ戦争がフィンランドにとっての対ソ均衡要因であるドイツの敗北にみちびきかねないことへの懸念を表明し、アメリカやイギリスなどの西欧列強の理解を求めることに、あったのであろう。パーシキヴィは、かれの政府批判の見解を人に語ることにきわめて慎重であったが⁵⁴⁾、アメリカ公使との接触は続けていた。1942年12月4日の会見では、かれは、物資補給の点でフィンランドがドイツに依存していることが大問題であるとし、またフィンランド軍がムルマンスク鉄道の攻防に介入せず、ドイツ軍のレニングラード市攻撃への協力を拒否していることを強調して、これを対米ジェスチュアと推測している。ここではパーシキヴィは、フィンランドがドイツの対ソ戦争に決定的にコミットする意図をもたないことを印象づけようとしているのである⁵⁵⁾。ところが1943年2月になると、パーシキヴィは、すでにドイツの敗北を予想し、アメリカ公使にたいし、対ソ和平の見通しがたちにくいことについて、焦慮をもらしていた。すなわち、かれは、2月10日の会見で、フィンランドの世論が対ソ和平を受け入れるまでに熟していない、と述べ、対ソ接近を方針とするフィンランド大統領の登場を望む、としていたが⁵⁶⁾、20日には、対ソ和平が焦眉の急であるとし、フィンランドは、和平提案が現在よりもソ連にとって実体的な意味をもっていた前年(1942年)秋に好機会を逸した、今やソ連軍は東部戦線全般において勝利を収めつつある、と慨嘆した⁵⁷⁾。

このようなパーシキヴィは、社会民主党内の「体制内和平派」であるペッカラ、ケト、

52) この点の詳細および典拠については、百瀬 宏「フィンランドの対ソ関係 1940-1941年——『継続戦争』前史に関する覚書——」(『スラヴ研究』16), 240-241 ページ参照。

53) Schoenfeld to Hull, June 3, 1942. *FRUS*, 1942, ii, 62.

54) Svento, *mt.*, s. 11.

55) Schoenfeld to Hull, Dec. 5, 1942, *FRUS*, 1942, ii, 103-104.

56) McClintock to Hull, Feb. 11, 1943, *FRUS*, iii, 234-235.

57) McClintock to Hull, Feb. 20, 1943, *FRUS*, iii, 240.

スヴェント Reinhold Svento らと「早い段階」から接触をもっていたといわれる⁵⁸⁾。1943年7月になると「体制内和平派」は、「開明会」(Sivistusseura)の名称のもとに、政府当局には秘密裡にパーシキヴィと連絡をとり、既述の大統領宛質問状計画にしてもかれの見解を叩いていた⁵⁹⁾。こうして「体制内和平派」の隠然たる支持者であったパーシキヴィは、すでに前節において述べたように、1944年春の対ソ和平交渉には、エンケルとともにフィンランド側代表としてモスクワに赴くのであり、またこれも既述のように、その後の絶望的な状況下に企てられた亡命政府樹立の計画にたいしては、ツィリアクスらの構想には基本的に賛意を表しながらも乗ろうとしなかったが、ニュステーンらの構想については現実的であるとの評価からコミットする姿勢を示していた⁶⁰⁾。

(3) 反体制反戦派の活動

議会外の勢力のみによって組織的に行なわれた反政府活動の主だったものに、SKP内外のそれがある。もっとも、SKPの活動といっても、われわれが知りうるのは、1958年に書かれたSKPの党史⁶¹⁾、SKP脱退者ランタネンの回顧録⁶²⁾および前掲のヴィータラの研究から出てくる断片的な事実のみであり、またSKPの活動として一括しうるほどのまとまりも欠いていたであろうことは、ここで指摘しておかなければならない。

ヴィータラの研究によれば、第二次対ソ戦争の直前にフィンランド全土において「極左分子」の逮捕が行なわれ、SKPの秘密指導部は、2名を除いて逮捕された⁶³⁾。しかし、1941年の7月中旬に、逮捕を免れた幹部の1人リッカ Aimo Rikka はヘルシンキの党員と合流し、対ソ戦争の終結と和平の締結を呼びかける宣伝・煽動の工作を始めた。ところが当初から、SKPの名称を出そうと欲するリッカと、その意義を認めない党員のあいだに見解の対立が生じた。両者のあいだには当面妥協が成立し、前者はSKPの名のもとに宣伝活動を行ない、後者は、「フィンランド人民解放同盟」Suomen Kansan Vapauden Liitto (SKVL)の名で「小ブルジョワ」や「知識人グループ」への影響拡大を狙ったビラを配布した。9月になると逮捕されていた幹部の1人レイノ Yrjö Leino がリーヒマキの監獄から脱走して、リッカとロンクヴィスト A. Rönnqvist とともにSKPの最高指導部を形成したが、10月に、政治宣伝を担当するリッカが発行した新聞の第1号が戦争の「革命的な終結」⁶⁴⁾を方針としたことに端を発して、さきに成立していた均衡状態は崩れ、それぞれの傾向を代表するリッカとレイノの関係は動揺した。しかも年末には、SKPの軍事グループを担当するロンクヴィストが逮捕され、党の活動目的をめぐるリッカとレイノの見解対立も進んだ。レイノはリッカを中央指導部から除外しながらも事の表面化を避けようとしたが、翌年3月になるとリッカは、19ページにおよぶ覚書を作成してレイノの期

58) Viitala, *mt.*, s. 117. もっとも、「早い段階」という言葉だけで、ヴィータラは、それが具体的にいつかを述べていない。

59) *Ibidem*, s. 104.

60) *Ibidem*, s. 186.

61) *Kipinästä tuli syttyi, Muistiinpanoja Suomen Kommunistisen Puolueen 40-vuotistaipaleelta* [火花は炎となった。フィンランド共産党40年の歩みの回顧] (Helsinki, 1958).

62) S. Hj. Rantanen, *Kuljin SKP : n tietä* [私はSKPの道歩んだ] (Helsinki, 1958).

63) Viitala, *mt.*, s. 59. なお、*Kipinästä*, s. 211.

64) これは、ヴィータラの表現である可能性がつよい。Viitala, *mt.*, s. 76.

第二次大戦中のソ連のフィンランド政策

待を破り、そのため党活動から締め出されるにいたった⁶⁵⁾。しかも、1942年夏リッカが逮捕されるにおよんで、SKPの指導部はレイノ路線の新聞のみを発行するにいたった。しかし、これとてもSKPをめぐる状況の悪化と相次ぐ逮捕によって困難となっていた。SKPの地方組織の活動がふたたび活発化するのには、ようやく1944年春になってからであり、SKP、「民族委員会」Kansalliskomitea、「人民戦線組織」Kansanrintamajärjestöの3つの組織の名のもとに、宣伝活動が行なわれたのであった⁶⁶⁾。

それでは、SKP内外のこれらの活動参加者は、フィンランドに関して、具体的にいかなる終戦形態を考えていたのであろうか。この点を確信を以て論ずるには、まだあまりにも史料不足であるが、リッカに対立するレイノ派が、ソ連との和平を何よりも第一義としていたであろうことは、容易に推測できる。しかし、戦争の「革命的な」終結を唱えていたリッカにしても、ヴィータラが行なった面接調査によれば、ソ連が大戦の最終段階において能うかぎりの力を対独戦闘に集中できるようフィンランドの和平達成を望んだのであって、フィンランド側が明確で政治的にも意味をもつ和平工作を行ないさえすれば、ソ連はフィンランド側の「人物の大交代」は要求せずに戦争を終らせる用意があると、考えていた⁶⁷⁾。ただ、リーヒマキの獄中にあった、そして戦後のSKPの指導的地位にはつかなかったいく人かの共産主義者が、ソ連がフィンランドを占領するであろうと信じ、またそれがフィンランドにおける社会主義への道を実現すると考えていた、といわれる⁶⁸⁾。

ところで、第二次対ソ戦争中の反体制的活動には、「森林ゲリラ」Metsäkaartilaisetも含まれていた。もっとも、ヴィータラによれば、森林ゲリラはしばしば、たんなるフィンランド軍の脱走兵と混同されており、この点の区別が必要である。フィンランド軍部の統計によれば、第二次対ソ戦争開始の年には2350の脱走兵を数えることができ、1943年までの総数を合すれば3500にのぼったといわれるが、それらのほぼ半分、すなわち、それぞれ1300人、1900人が「森林ゲリラ」と推定されている⁶⁹⁾。「森林ゲリラ」の活動の具体的な面についての記述は、ヴィータラの書物には明らかにされていないが、実際に「森林ゲリラ」に参加したランタネンは、その回顧録において、その一端を述べている。それによれば、ランタネンが属した「森林ゲリラ」には、フィンランド軍からの脱走兵のほか、政治工作員や元赤衛兵が参加しており、橋梁の爆破その他のさまざまな破壊活動をもくろんだのであった⁷⁰⁾。この森林ゲリラは、6月22日に独ソ戦が始まるとその直後に、SKPのかねての決定にもとづいて、サボタージュ活動を目的として結成されたもので、非合法の司令部に結合していた⁷¹⁾。森林ゲリラの拠点は、敵中降下隊(desant = десант)を

65) *Ibidem*, s. 77.

66) ヴィータラによれば、これらの活動に関する史料は、まだ研究者にとっては閉ざされている。Viitala, *mt.*, s. 79.

67) *Ibidem*, s. 173. もっとも、これは戦後の、研究者によるヒアリングにたいする回答であることに注意を払う必要がある。この見解は、あまりにも、戦後のフィンランドの対ソ関係像と重なりすぎてはいないであろうか。

68) *Ibidem*. これも、リッカの証言であることに留意されたい。

69) *Ibidem*, s. 65.

70) Rantanen, *mt.*, s. 115.

71) *Ibidem*, ss. 106-107.

迎えるのに好都合な場所につくられており、拠点の各兵士は小銃などの武器をもっていた。ランタネンが属した森林ゲリラの任務は、その活動をつうじてフィンランドの西南部を分断することであり、ドイツと戦う諸国の政府に支援を要請することになっていた。また上層からの情報として、オーランド群島に、SKP の関係者ペッカラ Eino Pekkala⁷²⁾を首班とする新政府が形成される、という計画が伝えられた。ランタネンによるこの証言は、しかし、部分的なものであり、全体として森林ゲリラの参加者が、どの程度の士気を持ち、いかなる成果を挙げたのか、を伝える史料文献には、筆者はまだ接していない。まして、この証言に触れている、SKP が主体となった政権樹立構想なるものの実体については、筆者はまったく判断を下すことができない。

* * *

ところで、以上に見てきたような「反政府和平派」にたいして、ソ連政府はいかなる評価を与え、これにいかに対応していたのであろうか。この点を明らかにする史料文献はきわめて乏しいが、まず、「体制内和平派」についてみることにしよう。

スウェーデン駐在のアメリカ公使が、1943年6月2日に、本国に報告しているところによると⁷³⁾、ストックホルムのソ連公使館参事官のヤルツェフ Борис Ярцев が、公使館員にたいして次のような発言をなした。「現在のフィンランド政府と前回のものとの間には、何の相違もない。議会の反対派が政府を統制下におく可能性はほとんどない。リュティの財政上の権力や、タンネルの党組織力、またヴァルデンが産業界でもつ力には、議会の反対派のいかなる指導者といえども挑戦することができない。和平条件についてソ連から保証をうれば他の勢力が現在の政府を放逐するだろう、という思いつきは、したがって問題にならない。／フィンランド人はアメリカとの関係を重視しているが、フィンランド人には、ドイツとの連合から脱出するようアメリカが主張していることをさとらせるべきであるし、またこのことは、アメリカ公使館がヘルシンキより完全に引揚げることによってのみ、可能である。／ソビエト政府はバルト三国の独立の権利は認めていないが、フィンランドとポーランドが戦後独立国であることは、繰り返し述べてきた」。

ここにヤルツェフとは、さきの「冬戦争」に先立ち、駐フィンランド・ソ連公使館員として秘密裡にソ連の要求をフィンランド側に伝える使者の役割をつとめた人物であって、二等書記官という公称のもとに実はクレムリンの首脳者から、ソ連公使を越えた密命を帯びていたのであった⁷⁴⁾。本稿で扱っている時期についても、ストックホルム駐在のソ連公使館きってのフィンランド通として知られており、明らかに、対フィンランド和平工作の密命を帯びて同地に滞在していたと思われる。上に引用したかれの発言は、筆者の管見するかぎりにおいて、フィンランドの「体制内和平派」にたいするソ連側の評価を伝えた、ほとんど唯一の史料であるが、ここから窺われることは、ヤルツェフが、ソ連政府の対フィンランド政策を自信をもって代弁しうる立場にあることと、かれのフィンランド情勢にたいする観察が明解なことであろう。ヤルツェフは、「体制内和平派」がその意図するようなフィンランド政府のコントロールを果しえないと見ており、フィンランドの対外政策

72) 社会民主党のペッカラ (Mauno Pekkala) とは別人。

73) Johnson to Hull, June 2, 1943, *FRUS*, 1943, 279.

74) 前掲小著, 116 ページ参照。

路線の変化は、外側からの圧力によってのみ強制しうるものと、考えていたのである。そしてヤルツェフないしソ連側の「体制内和平派」にたいする期待度は、大統領選挙やそれに続く内閣交代が顕著な事態の変化をもたらさなかったことによって、とくに低まっていたといえるであろう。

筆者が知りえたところでは、ソ連側と「体制内和平派」の接触の可能性は、1944年春から夏にかけて、既述の亡命政権樹立の計画や和平交渉準備工作とからんで生じたと思われる。ただし、亡命政権の一方の構想の計画者であるツィリアクスが駐スウェーデン・ソ連公使コロantaiと会見したか否かについては決定的な証言はない⁷⁵⁾。しかし、同年7月14日に、スウェーデン外務省の了解のもとにコロantaiと会見したスウェーデン人男爵ベック＝フリース H. G. Beck-Friis にたいして、コロantaiは、自分がフィンランドの運命について関心をもっていること、ソ連側ではフィンランドの件についてはまだ最終的な結論を下しておらず、従って和平締結の可能性はまだある、という印象を自分がもっていること、を述べ、少なくともリュティとタンネルが去った新しいフィンランド政府が自分の方から和平を提議すべきである、と強調したのであった。その際コロantaiは、フィンランドには政府批判の潮流があるか否かを問うた。ベック＝フリースがおそらく出したのであろう亡命政権構想については、コロantaiは、フィンランドで活動しているものでなければならぬとして評価しなかった。実は、ベック＝フリースは、今ひとつの亡命政権構想を抱いていたニュースーテン・グループがストックホルム派遣を企図していたケッコネンとの接触のもとにこの活動を行っていたのであり、この成果は、ただちに外相ラムサユに伝えられ、リュティの辞任とマンネルヘイム大統領下のフィンランド政府による公式の対ソ和平交渉提議へと事態が急速に進展したのである⁷⁶⁾。この経過からみるならば、ソ連側は、対フィンランド戦争の終局段階になって、フィンランド政府との和平交渉の端を開くにあたってようやく、「体制内和平派」を活用する機会をもった、といえるであろう。

つぎに、「反体制和平派」に関して見るならば、ソ連側がリッカやレイノらの SKP 内外の運動をいかに評価していたかを直接に示す史料文献に、筆者はまだ接していない⁷⁷⁾。ランタネンの回顧録などをつうじて辛うじて知りうることは、ソ連軍と「森林ゲリラ」のあいだに、連絡と協力が確実にあったことである。ランタネンの回顧録によれば、少なくともかれの所属する森林ゲリラにたいしては、フィンランド湾を隔てて対岸のパルディスキ Paldiski から、数千の輸送機が武器その他の援助を与えに飛来する旨の通告が届いていた⁷⁸⁾。また実際にランタネンは、敵中降下隊の飛来を体験していた。その折は、フィンランド人を含む2名が来襲した輸送機から落下傘降下し、オーランド群島のゲリラ本拠に案内された⁷⁹⁾。また、同じくランタネンが回顧録で述べているところによれば、ソ連から飛来した敵中降下隊員9名は、フィンランド軍総司令部員の殺害の密命を帯びてミッケリ

75) Viitala, *mt.*, s. 186.

76) Viitala, *mt.*, ss. 186-187.

77) 間接的にこの点を明らかにする方法としては、ソ連側の当時の新聞や定期刊行物を詳細に内容分析することも考えられよう。しかし、筆者はこれを行なってはいないし、またこの方法がこのばあい成功するか否かについても確言することはできない。

78) Rantanen, *mt.*, s. 107.

79) *Ibidem*, s. 113.

附近に降りたが、フィンランド人側との連絡は好首尾に運んだものの、成果は飛行機の掩体を炎上させたにとどまった⁸⁰⁾。以上のように、ソ連側は、フィンランド軍後方のゲリラ組織とも連絡をとっており、こうした意味での反体制勢力を重視していたことは事実であるが、しかし、これはあくまでも、ソ連軍の対フィンランド戦争を有利に導くためのものであって、軍事的な見地からするものであり、フィンランドの政治体制の変革を狙ったという証左とはいえない。

〔附記〕 本稿は文部省科学研究費による研究成果の一部である。

80) *Ibidem*, ss. 132-133.